氏名	小島　久典
ヨミガナ	コジマ　ヒサノリ
学位の種類	博士（文化財）
学位記番号	博美第485号
学位授与年月日	平成27年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉　鎌倉時代の菩薩形像における彫刻制作の計画性とその変更について ―東大寺中性院弥勒菩薩立像模刻制作を通して―
	〈作品〉　東大寺中性院　弥勒菩薩立像　想定復元模刻
	東大寺中性院　弥勒菩薩立像　縮尺模型

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	籔内　佐斗司
（論文第１副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	松田　誠一郎
（作品第１副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	深井　隆
（副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	森　淳一

（論文内容の要旨）

現在、東大寺中性院に安置される弥勒菩薩立像（以下、中性院像と略称）は、像内納入品により、建久年間（1190～1199）の作であることが知られる。作者は明らかでないものの、有力な慶派仏師の手になるものと考えられ、衣縁を波打たせた独特の着衣表現などから、いわゆる宋風彫刻の代表例とされてきた。その一方で、近年では服制や軽やかな三屈の姿勢などが平安初期彫刻に依拠している可能性が指摘されるなど、諸先学によって様々な論考がなされている。なかでも構造面では、脚部を別に造り体部に挿し込むという、特殊な仕口を持つことが注目されている。脚部を挿し込み式にする例はこの時代以降、次第に増えることが知られており、清凉寺釈迦如来像のような宋代彫刻の影響を考える論考もある。しかし、中性院像の挿し込まれた脚部は特に長く、像内に嵌め込んだ棚板に固定されるなど他作例とはかなり異なっており、その目的は明らかではない。

また、中性院像はのちの善派に繋がる要素を持つことが指摘されている。仏師善円をはじめとする善派は鎌倉時代中期に現れ、清冽かつ繊細な作風で知られるが、その仏師系統についてはいまだ不明なところが多い。

中性院像の脚部構造に関するこれまでの論考では、単に脚部が別材で造られているという点のみが着目され、その詳しい構造や目的、実際に制作する際の利点や不都合な点については詳しく述べられてこなかった。また、本研究に際して行った熟覧調査および透過X線撮影・3次元レーザー計測等の科学的な方法による調査・分析によって、中性院像が、これまで考えられてきた以上に極めて複雑な構造を持っていることが判明した。

本研究では、中性院像の構造がどのような経緯により造られたものなのかを実証的に明らかにするため、中性院像の模刻制作を行った。模刻制作においては、前述の調査方法で得られた結果に基づき、可能な限り原本像に近い法量・技法・材料で制作を行った。

第1章では、先学により明らかにされた知見に、今回の調査で新たに判明した分析結果を加え、中性院像の構造を詳細に検討した。

第2章では、筆者が実際に行った、中性院像の模刻制作から得られた情報に基づき、それぞれの構造の詳細と目的について考察した。そのうち、玉眼の固定法、変則的な割首、右肘の矧ぎ目、挿し込まれた脚部について、調整を繰り返すことができる工法であり、改変を前提とした、作者の周到な工作であった可能性を指摘した。また、現状では造像当初とは形式が異なっているとみられる天衣、および亡失している垂髪について考察を加え、中性院像の当初の造形を推定した。

第3章では、中性院像における形状改変が、像自体の造形にどのような変化をもたらしたのかを明らかにするため、同時代の慶派作例との比較を行った。その結果、中性院像はボストン美術館弥勒菩薩立像（快慶作）や浄楽寺阿弥陀三尊のうち両脇侍像（運慶作）のような他の慶派作例と大きく異なる特徴を示し、それが形状改変によるものであると推察した。続いて中性院像と善派作例を比較し、従来指摘されてきた、U字形に懸る天衣や玉眼の工法などの共通点に加え、体型と動勢においても多くの共通点が認められることを指摘した。

総括では、中性院像は改変が行われる以前から、既に方向性の異なる表現が志向されていたこと、また造形の修整を繰り返すことを前提とした工法をとっていることから、中性院像が新しい造形表現を生み出すための実験的存在であったと指摘した。そして、のちの善派作例にみられる様々な特徴が、中性院像における度重なる形状の改変・修整の結果造り出された仕様と共通することから、中性院像こそが慶派から善派へと繋がる明確な分岐点であり、プロトタイプであったと推論した。

（論文審査結果の要旨）

申請者の論文は、東大寺中性院の弥勒菩薩立像の制作技法の特質を論じ、その造形表現を鎌倉時代彫刻史上に位置づけようと試みたものである。

制作技法の検討は、X線透過撮影や3Dレーザー測量の成果を参照しながら、精巧な復原模造制作を通して実証的に行われている。コの字形の割首、板材矧付けによる腹部・脚部の造形補正、両足の差し込み固定、右腕の関節部位における丸ほぞ留め仕様などの特徴的な制作技法について、それぞれの詳細を明らかにしている。

ことに注目されるのは、各所にみられる特殊な技法について、歩行の姿勢を正確に表現するためのものであり、複雑な構造は、制作途中における調整を念頭に置いた計画的なものであると論じたことである。

中性院像の複雑多彩な細部構造のもつ意味を、表現の問題と関連づけながら、制作者の視点から統一的に把握しようとしたこの試論は、制作工程を復元した模刻制作によって実証的に論証されたものであり、きわめて説得力がある。

本論文が明らかにした中性院像の制作技法は、鎌倉時代木彫像のうちでも高い発展段階に位置づくものであり、わが国における木彫技法の歴史的展開を考える上で重要な意味をもつものと思われる。

また、後段における表現・技法に関する美術史的な研究は、本像が善円にはじまる善派仏師の作品と運慶に代表される慶派仏師の作品とをつなぐ位置にあることを明快に説く。装飾性の強い独特な作風と高い制作技術を有する本像の作者を、慶派と善派の接点に定位した点も、本論文における大きな収穫といえるであろう。

中性院弥勒菩薩像に関する本論の研究成果は、今後の文化財保存学や美術史学の研究に大きく寄与する優れたものであり、博士の学位を授与するに相応しいものと認められる。

（作品審査結果の要旨）

小島久典君は、鎌倉時代（建久年間）に造られた、東大寺中性院弥勒菩薩立像の想定復元模刻と同縮尺模型の２点を制作した。東大寺中性院弥勒菩薩立像（以下中性院像と略称）は、脚部が別材で造られ、差し込まれている構造に着目されている像である。小島君が修士課程で模刻制作を行なった、善派の代表作と言われている、東京国立博物館菩薩立像との強い相似性から、中性院像に行き着き研究対象とした。

模刻制作を行なうにあたり、３次元レーザー計測、透過X線撮影、熟覧調査等を綿密に行った。特に３次元レーザー計測は形を正確に捉える上で、また新規の透過X線撮影は画像が鮮明で、制作に大いに寄与した。

模刻を始めてみると、想像以上に複雑な構造に伴う今までにない工法を知ることになった。それらは変則的な割首であり，右肘の矧ぎ方、玉眼の固定法とそれに伴う頭部上部の寄せ木法、脚部の構造などである。これらの新しい解明は、何故このような方法を採ったのか、という問いに行き着き，同時期の慶派の像との比較，善派の像との共通点から、善派のスタイルの確立を目指し、変更を前提としたための複雑な構造であったと結論づけた。以後の善派の像には中性院像のような複雑な構造がないためである。これらのことは高

い技術を駆使して小島君が成し遂げた、模刻作業を経ることによってであることに他ならないだろう。変則的な割首は頭部の角度の調整のためであり、肘の矧ぎ方の特異さは手の角度の調整のためである。特に当初から問題視されていた差し込まれた脚の構造は、微妙に膝が折れており自然な立ち方の確立を摸索していることが窺える。また復元模刻像には、亡失していた垂髪の復元、造像当初とは異なると思われる天衣を当初の様式に直した。漆箔の古色仕上げも見事なもので、完成度の高い模刻像である。

もう１点の縮尺模型は、檜の素地仕上げであり、８０％のサイズでできている。複雑な構造が判るように、各パーツが少し離れた状態で組み立てられている。この優れた縮尺模型があることにより、中性院像の構造の理解に大いに役立っている。

以上のように、小島久典君が提出した２点の作品は、最高級の高い技術で完成された模刻像であり、また模刻により多くの新しい解明がなされるという、優れた研究となっており、高く評価したい。

（総合審査結果の要旨）

小島久典は、修士課程において、鎌倉時代の謎の仏師集団・善派の作例である「東京国立博物館所蔵　菩薩形立像」（以下、東博像）を模刻研究し、木地の仕上げながらみごとな成果を挙げている。そして博士課程においては、東博像よりも30年ほど以前に制作されながら、造形表現が大変よく似通っている東大寺中性院弥勒菩薩立像を研究課題として選び、その模刻制作を通じて、本像が持つ不可解な構造と技法の理由をみごとに解明し、両像の美術史的位置関係を論証することに成功した。超絶技巧とまで評される高度な伎倆を見せる本像を現状模刻する過程で、50パーツを超えるたいへん複雑で無計画にも思える構造を、X線画像や３Dレーザースキャニングデータを駆使することで丁寧に解析し、通暁の静止した菩薩像の造形表現から、歩みを始めている動態表現へと制作途中に改変するために施された合理的な処置の結果であることをつきとめた。また膝までを含む差し込み式の両足やそれを固定する棚板などの足回りの造作をはじめ、頭部を俯かせるための四角い割首や、玉眼の向きを微調整させるために頭部を横に切断していることなどの加工の理由も、原本と同じ工程を追体験することによってみごとに実証している。そして本像と東博像を比較することによって、建長年間に造られた本像が、後の東博像など極めて精緻な技巧を駆使して一時代を築きながら、仏師としての系譜が未だ解明されていない善派様式へと発展する道程をみごとに論証したといえる。この研究によって、慶派から善派へ移っていった鎌倉時代の南都仏師の系譜に関する研究が今後大きく進展することが期待されるなど、美術史的波及効果は大きい。また現状模刻像も、想定復元部分や古色仕上げも含め、非の打ち所のないみごとな完成度となっており、参考資料として提出されている構造模型や３Dデータによるコンピュータグラフィックスも、複雑な構造を理解する上で大きく寄与していることなど、プレゼンテーションも大変優れており、高い総合評価を与えたい。

また審査会当日に行った美術史一般に関わる口頭試問において、充分な素養を有していることを確認した。